

何を仕掛けるのか。

謎めいて甘い香りを放つ

イザベル・アジャニーニ

殺意の夏

ISABELLE ADJANI L'ÉTÉ MEURTIER

あるときはやさしく

あるときはあどけなく、あるときは残障に

美しく奔放な女に男は魂を奪われたが――。

男の父が遺した自動ピアノが鳴るとき、女の遠い過去の

悪夢が狂おしくよみがえる。そして、彼女にかかるすべての人の運命を狂わせてゆく…。



イザベル・アジャニーニ
アラン・スーション
監督ジャン・ベッケル

原作・脚本セバスチャン・ジャフリノ
創元推理文庫刊
音楽ジュールジュ・ドルリュ

カラー作品/フランス映画/日本ヘラルド映画





ISABELLE ADJANI
L'ÉTÉ MEURTIER

エルがその田舎街にやって来たのは夏のはじめだった。黒髪を軽くカールさせ肌をむき出しのドレスで包み腰を振って歩く彼女はたちまち街中の男の注目を浴びた。彼女が初めてパンボンに声をかけられたのは土曜日のダンスホールだった。

そう呼ばれる気のいい修理工のパンボン。そう、気のいいだけの男なのだ。

翌日、昨日はあんなに冷たく素気なかったエルがパンボンの処に自転車タイヤをわざと切り裂いてやってきた。果してエルもパンボンに気に入ったのか。街はずれのレストランへ食事に行くことを承諾したエルを。

パンボンが迎えに行くのと彼女は窓から裸のまま身を乗り出し、と替えひつ替えドレスをあててみせた。そしてパンボンが気に入ったのを選ぶと

まるで幼女のように魅了されたパンボンは、

彼女の「あなたの家の納屋に泊りたい……。」という言葉に我を忘れて喜んだ。

納屋に足をふみ入れた瞬間、藁に埋れた自動ピアノをみつけたエルの眼に暗く残酷な影が走ったことに気づきもせずに……

エルにはドイツ人なのでエバ・ブラウンと渾名されている母と下半身不随で車椅子に坐ったきりの父がいた。



イザベル・アジャーニ
監督ジャン・ベッケル
原作セバスチエン・ジャブリゾ
〈カラー作品〉フランス映画
日本ヘラルド映画



エルと彼の身体の事故とは何か関係があるらしい。エルの母は、パンボンの家で暮らすと云って荷物を纏めているエルを複雑な想いで見ていた。「この子が自分の出生の秘密を知ったのはいつだっただろう。」

1955年、雪の積った11月のある寒い夜、自動ピアノをトラックに積んだ3人の男達が彼女に道を訊ねた。

ドイツ人の彼女のことを嫌う義姉のところへ夫は出かけ、家には彼女一人きりだった。男たちは怯える彼女に無理やり酒を飲ませ肉体を陵辱した。

忘れもしない。傍で自動ピアノがヘビカルディのバラを奏でていた。パンボンの家で暮らすうちに、エルは、今は亡きパンボンの父が

問題の日に確かに自動ピアノをトラックで運んでいることを聞き出した。そしてあと2人の仲間が別の街で製材所を営むルバレット兄弟だということも。

そして、まんまと彼らは彼女の術中に落ちていった。

夏のまばゆい光のもと、パンボンとエルは結婚した。祝宴の真只中、何故か花嫁は姿を消した。うろたえながらエルを捜すパンボン。

一体、エルの仕掛けた罠とは何か。そして何の為に……。だが、その時既に運命のいたずらが思わぬ結末を用意していようとは誰一人知らなかった。

〈仏・セザール賞・最優秀主演女優賞受賞〉イザベル・アジャーニ

夏の意殺

